

# 土偶データ作成試験の経過と課題

植 木 弘

- 
1. はじめに
  2. 情報とそのデータ化
  3. Open Data と Personal Data の選別 (1) 形式的分類 (2) 部位とその属性
  4. 今後の問題点
- 

## 1. はじめに

土偶に関する無限に近い情報の中から、データベースとして有効な情報を選択し、データ化するという大きな課題に取り組んで早5年を経過した。ようやく今、その実践の段階に移ろうとしている。

情報のデータ化に関する概念設定については、すでに八重樫氏等によって具体的提示がなされてきた(八重樫他①1983, ②1984)。加えて筆者等を含めた研究会において度重なる討議を行ってきた訳であるが、文献②の時点では、なお多くの問題点を未解決のまま残していた。また、当初妥当と考えて設定した項目も、その後の検討により大幅に変更を余儀なくされるものも幾つか出てきた。

我々の構築しようとするデータベースの基本的目的は、現在一万数千点出土していると予想される全土偶の所在台帳としての整備である。すなわち「どこから」「どのような土偶が」出土しているのか、現在の「保管場所は」というような基礎的情報をいかに効率的に検索できるかという点に係わっている。

それに加えて、「どのような土偶が」の部分はいかにデータ化するかが考古学的には最も関心のあるところであり、蓄積されたデータが、将来の考古学の研究面で有効に機能するためには、そのデータ内容に関する概念的な位置付けが重要な意義を持つことになろう。本稿では、現在に至る間の様々な経緯を明示することにより、本データベースの考古学的な立場からの理論的前提となることを狙いとしている。

## 2. 情報とそのデータ化

文献②では、視座によっては無限に近いと予想される情報量の中で、データベースの構築に際し、対象とする情報を次の前提とする範囲に限定した。

〔前提〕

- (a) 情報抽出は主として観察による記述情報をもととする。
- (b) 形式、名称などは従来のできるだけ慣用されたものを用いる。
- (c) 土偶は具体的であれ凝縮的であれ、人形の五体を実現している。

情報をデータ化する際の基本的事項として再確認しておかねばならないことは、データの正当性がいかに保障されるかという点、すなわち、データそのものの客観性の問題と、多くの研究者が利用することを前提とした各々のデータ項目設定におけるソフトモデルの適合性の二点に集約されよう。

データの客観性という問題は、考古学上取扱われる遺物の中でも特に土偶においては困難な要素を数多く内包しているといわねばならない。最大の問題点は、土器等に比べてかたちの規格性に乏しいということである。これは、換言すれば、土偶の製作者を含めた集団の「型」に対する許容の範囲が大であったということを示している。胴部に頭部と両腕部を粘土のつまみ出しによる僅かな張り出しで表現した個体と、指先や頭髪のかたちまでもを詳細に表現した個体とを観察した場合、両者は同じ「ひとがた」であり、共に土偶であることは認識される。しかしながら、その「かたち」つまり具体的な表現の相違についての理解の仕方は、多くの研究者の間で決して一様な答えは得られないであろう。例えば、第2図1のような腕部や頭部を第4図44のそれと同列に扱い得るのか、また、1や2には表面上は脚部が示されていないが、果たしてこれが「脚のないひとがた」であったのか、あるいは当時の人々は、脚を暗黙のうちに視野に入れていたのかどうか、などといった事柄である。

土偶自身の「かたち」が内包する多くの問題点は、現在の考古学にとってそれ自身が一つの研究テーマであり、その方法論が必ずしも統一されていない現状にあってはデータ項目の設定作業そのものに周到な注意が払われなければならないといえよう。土偶研究者の立場からすれば、データ項目は多ければ多いほどその利用価値は増すだろう。しかし、それらあまたの項目に優先順位を付し、選択する段階ですでに設定者の個人的意志が働くことになり、その分だけ客観性が損なわれることも事実である。

さらに同様な見地から、データ内容のコード化の段階で、項目を細分化する程、明

確な数値化が困難になることも追記しておかねばならない。後段でも触れるが、当初は土偶の部分について人体のそれに対応させたマクロな細分とコード化を試みたのであるが、前出の例にあるごとく様々な表現方法をとる個々の個体は、一面では共通した次元での理解が不可能といわねばならず、文献②で問題点として指摘されているように、定量化の方法論は現在なお基本的研究課題となっている。

このように、我々はデータ化における客観性の追及と、ソフトモデルの適合性に関して、一度は徹底的なマクロ化を行い、その上で不整合と判断される部分を一項目ずつ排除していくという作業に大きな時間を費やさなければならなかった。結果として設定者が個人の研究課題に触れるような思考を介在させなければ定量化し得ないデータは“Personal Data”として一切排除することを確認し、必要最低限の客観的事実から得られるデータ“Open Data”のみを採用することとなった。いうまでもなくOpen Data については、将来的には研究者がそれぞれ Personal Data を設定し、個人的な研究を行う際の基礎資料として十分に機能し得るものでなければならない。しかし、最終的に残された項目は、情報量としては非常に僅かなものとならざるを得なくなった。

ところで、データ項目の客観性については、以上述べてきたように Open Data に限定することである程度解決のめどが立ったが、今後収集するデータ内容の均一性については、文献②の時点における前提(a)の記述情報によった場合、十分に達成できない危険性が生じてきた。むしろ記述情報は極力少なくすることにより客観性と均一性は保証されると考えるべきであろう。ただし、それに伴いデータ内容の厳密性を保つため、可能な限りの属性をあらかじめ抽出設定しておかねばならないことはいうまでもあるまい。

### 3. Open Data と Personal Data の選別

文献②の時点では、土偶の基本属性を次のように考えた。

- 形式的分類 (1) 通称様式名  
 (2) 構造様式  
 (3) 形態分類
- 部位と属性 (4) 出土部位  
 (5) 測定値  
 (6) 部位属性

(7) 欠損・作用属性

この中から現時点でのデータベース実用化に向けて、さらに **Personal Data** に関する項目を整理していくと次のように修正された。

- 形式的分類 (1) 通称名
- (2) つくり
- 部位と属性 (3) 遺存部位
- (4) 測定値
- (5) 特記事項

そこで、文献②から今回に至る経過で排除されたものをも含めて、各項目の内容とデータとしての問題点を整理してみたい。

(1) 形式的分類

1) 通称名

形態分類すなわち型式化は、考古学における最も基礎的な作業である。現在のところ筆者等が識別し得る土偶型式は、およそ60にのぼる(第1表)。文献②では11の典型的型式が列挙されたが、これではとても全型式を網羅できるものではなく、これに当てはまらない個体の扱い方に問題を残していた。

型式の設定は多分に研究者個人の認識に拠るところが大であり、筆者等が現在知る範囲内での型式設定や任意の取捨選択は、今後の全国規模での資料収集の際に多分に混乱を招く恐れがあると考えられる。従って形態分類(型式分類)は **Personal Data** と判断した。しかし、中には表現上の特徴から「山形土偶」「みみずく土偶」「遮光器土偶」などのニックネーム的な型式名が与えられたものが幾つかある。これらは認知度が高く、また、学史的にも意義があるため、今回は代表的なものとして「板状土偶」「十字形土偶」「ハート形土偶」「筒形土偶」「山形土偶」「みみずく土偶」「遮光器土偶」「ポーズ土偶」「両面土偶」の9類型を挙げた。ただし、限られた地方や一部の研究者間で呼び習わされている名称についても、今後一般に定着する可能性を考慮して、記入方式の「その他」欄を設け、上記以外の名称の収集にも心掛けるようにした。

2) つくり

一方、土偶の構造「つくり」に関する情報は、前の形態分類が「型式」(Type)の次元における分類であったのに対し、いわば「形式」(Form)に関する概念としての性格を持っている。文献②では、その具体的内容を1次、2次という二重の属性によ

第1表 土偶型式一覧

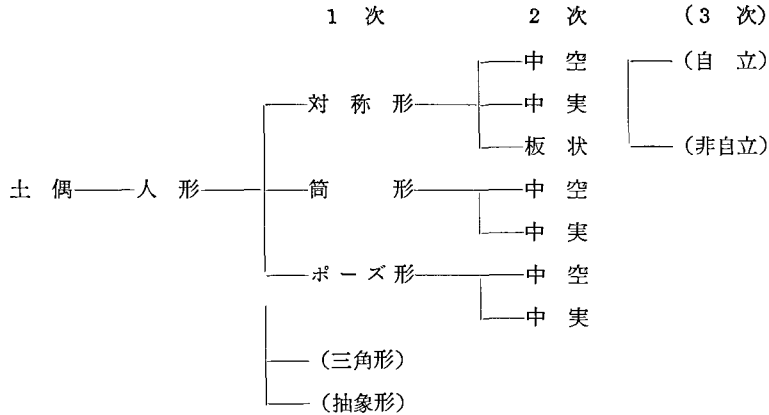
No.		伴出土器型式	通称名	遺跡名
1	早期	撚糸文第Ⅲ～Ⅳ様式		花輪台貝塚
2		〃		木の根遺跡
3		貝殻沈線文系		西大宮バイパスNo. 4 遺跡
4		条痕文系		天神山遺跡
5	前期	円筒下層式	板状土偶	是川一王寺遺跡
6		大木2b式		杉則遺跡
7		諸磯b式		八幡山遺跡
8		諸磯b式		四枚畑貝塚
9		大木6式		糠塚貝塚
10	中期	五領ヶ台式		西野遺跡
11		大木7a式	板状土偶	大館町遺跡
12		〃	〃	大館町遺跡
13		〃 8a式	〃	北館遺跡
14		円筒上層式	〃	石神遺跡
15		〃	〃	陣場遺跡
16		大木8a～8b式	〃	八景腰巻遺跡
17		〃		月崎遺跡
18		大木10式	板状土偶	孫内遺跡
19		長者ヶ原式		長者ヶ原遺跡
20		勝坂式	河童形土偶	八乙女五輪遺跡
21		馬高式		吉野屋遺跡
22		〃	三角形土偶	栃倉遺跡・須原遺跡
23		大木8a～8b式	〃	月崎遺跡
24		阿玉台式	板状土偶	宮平貝塚
25		勝坂式		藤内遺跡
26		〃		櫛田遺跡
27		加曾利EⅠ～EⅡ式		膳棚遺跡
28		曾利式		葦原遺跡
29		勝坂式	ポーズ形土偶	上黒駒遺跡
30	後期	十腰内Ⅰ式	板状土偶	四つ石遺跡
31		〃	〃	中野平遺跡

土偶データ作成試験の経過と課題

No.		伴出土器型式	通称名	遺跡名	
32	後 期	十腰内Ⅱ式	〃	近野遺跡	
33		堀之内Ⅰ式	〃	金田遺跡	
34		堀之内式	ハート形土偶	郷原遺跡	
35		〃	筒形土偶	三ツ沢貝塚	
36		加曾利BⅠ式		新町遺跡	
37		加曾利BⅠ式		立石遺跡	
38		加曾利B式	山形土偶	椎塚貝塚	
39		加曾利B式		金洗沢遺跡	
40		加曾利B式	ポーズ形土偶	上岡遺跡・立石遺跡	
41		安行1～2式	みみずく土偶	馬室遺跡	
42		三万田式		上南部遺跡	
43		〃		四方寄A遺跡	
44		晩 期	大洞B～C <sub>1</sub> 式	遮光器土偶	亀ヶ岡遺跡・長倉遺跡
45			大洞C <sub>2</sub> 式		鍛冶屋敷遺跡
46	〃		X字形土偶	豊岡遺跡	
47	〃			札刈遺跡	
48	大洞A式		結髪形土偶	釜淵遺跡	
49	〃		刺突文土偶	秋田県内	
50	大洞A'式			二枚橋遺跡	
51	安行Ⅲb～Ⅲc式			小山台遺跡	
52	〃			なすな原遺跡	
53	〃			西広貝塚	
54	後期末～晩期			小野天神前遺跡	
55	清水天王山式			中谷遺跡	
56	後期末～晩期中葉			樫原遺跡	
57	後期末～晩期中葉			馬場川遺跡	
58	浮線網状文系			小和瀬遺跡	
59	〃	有髯土偶	長野県内		

り理解しようと試みた。当初は、3次属性として土偶自身が直立できるか否か、すなわち自立・非自立という性質についても検討されたり、さらに遡ると、1次属性の中に三角形・抽象形といった分類が挙げられたこともあった。

## &lt;構造様式と属性値&gt;



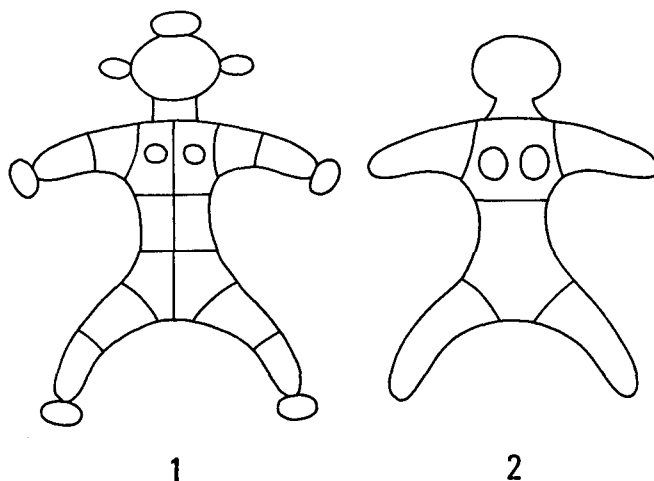
このように、土偶の構造様式（形式）を、複数の異なった次元の属性に分解することで理解しようとしたのであったが、1次属性は、対称形と筒形・三角形の区分について、また、抽象形についても概念上の設定基準に曖昧な点を含んでいた。3次属性についても同様に自立、非自立の二者に限定する必然性に疑問が残った。結局それらは多分に土偶の表面的形状の個人的理解の仕方に係わってくる問題であるため、筒形・ポーズ形などは通称名の中に含めることとし、現時点におけるOpen Dataは最終的には「つくり」の面から中実と中空とに留めることとなった。特に観察上の客観性を保つ意味から、板状についても中実を含めた。また、一部分のみが中空でその他は中実というような個体の問題が指摘されようが、煩雑化を避けるため、いずれかに中空部分があれば中空と規定し、その範囲は {a ほぼ全身 b 頭部 c 胴・腹部 d その他 ( ) } の項目内で示すこととした。

## (2) 部位とその属性

今までに行ってきた研究討議の経緯の中でも部位については特に問題の多い箇所であり、我々の討議の大半はこの項目のコード化の作業に関するものであった。

## 1) 遺存部位

先前提(c)により土偶の各部位は、人形の<sup>ヒトガタ</sup>五体を実現したものとして、人体の各部位の名称に従うことになった。将来的なデータベース利用面での有効性を考えた場合に、例えば右手先が欠失した個体の分布を知りたいというようなニーズに答えられるよう、当初は、文献①に示されたような非常にマクロな分割が行われた(第1図1)。しかし、そこで問題となったのは、様々な表現の相違をもって実現した各土偶の部位



第1図 土偶の部位属性区分模式図

をどこで線引きすることにより区分するかということである。前にも触れたように、腕部であることは認識できても、どこが肘でどこからが手なのかといったような細部は判別し難い個体の方がむしろ大部分といってよい。それでは仮に手先の表現されていない個体が、製作者の側に立って見た場合、あらかじめ土偶から手先を切断したかたちを表現したのかという、それは恐らく否である。表現上手先の区分されていない個体であっても、腕部先端のみが打ち欠いてあるような個体も少なからず存在するところなどを見ると、製作者は単純な表現の腕部の中にも概念的には手先もきちんと含めていると理解する方が妥当であろう。

そこで次に、部位に関するデータをコード化する段階では、欠損部をパーセンテージによって数値化する方法も考えられたが、全ての土偶が刃物で切ったように割れている訳ではなく、示された数字自体甚だ曖昧なものとなる恐れがあり、今後の実際的な利用には有効ではないだろうと判断された。結局は頭・胸・乳房（左右）・腹・腕（左右）・脚（左右）という基本的に全個体を共通の認識で理解することが可能な最低限の分割に留めた（第1図2）。また、この項目を欠損部に着目せず、遺存部位のチェックという形にしたのは、頭部のみ、右腕のみといった個体が圧倒的であることによる。

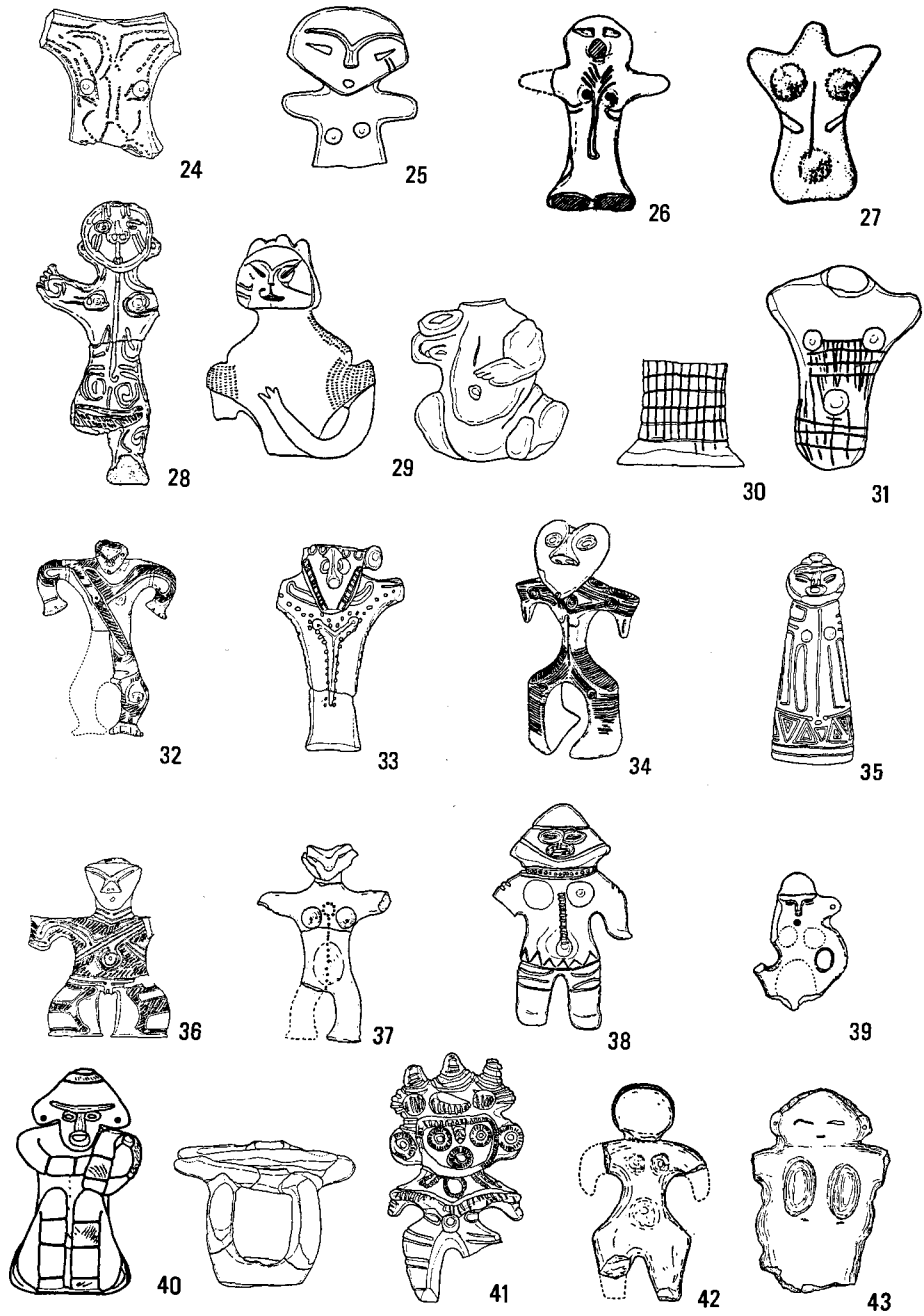
## 2) 測定値

当初は我々が一般的に行っている高さ・幅・厚さの記入を考えたが、欠損品の多い

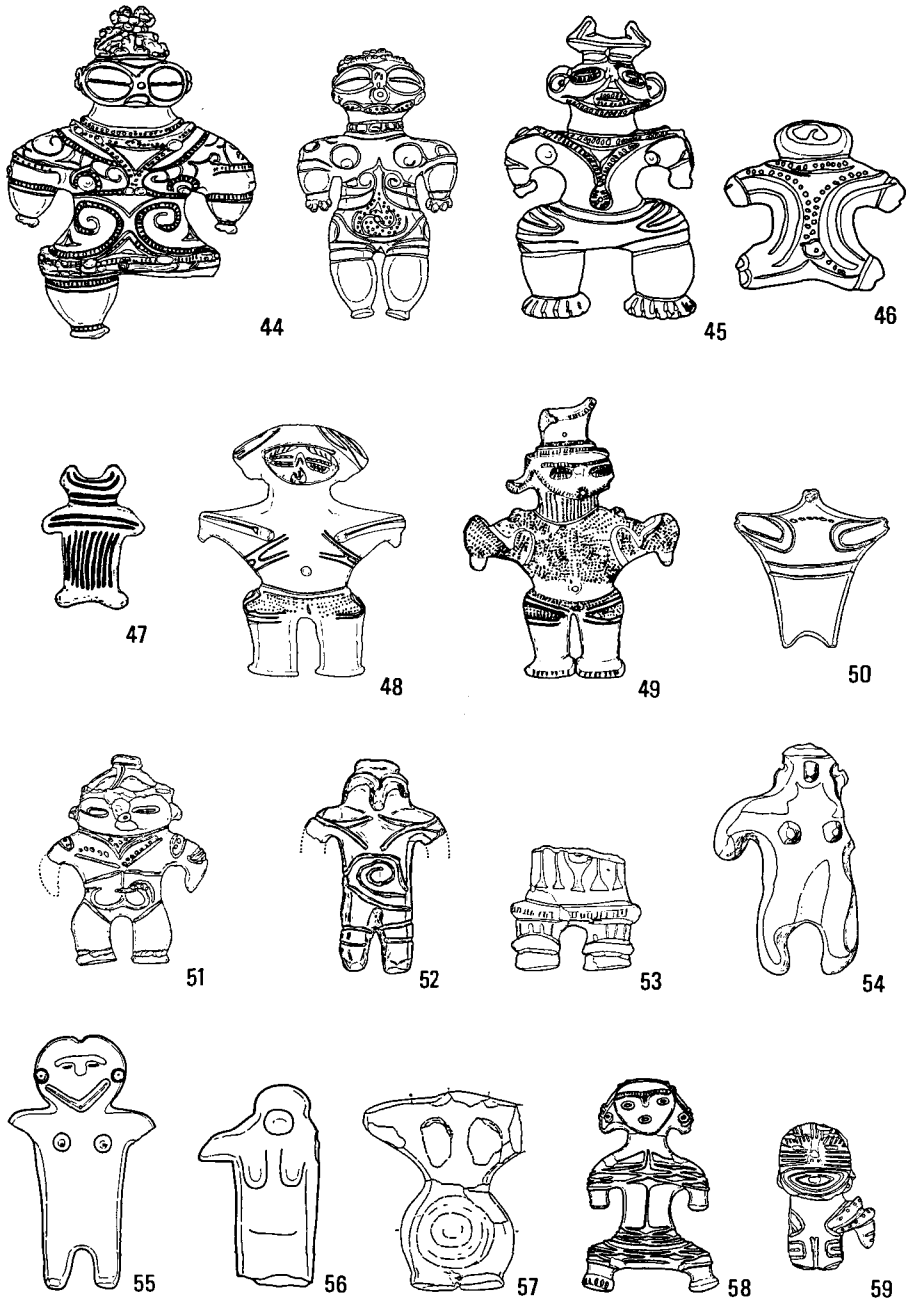




第2図 主要な土偶型式(1)



第3図 主要な土偶型式(2)



第4図 主要な土偶型式(3)

土偶にあっては、データとしての利用価値は少ないように思われる。そこで基本的に現存最大高のみを記入する方法を採用した。

測定値と共に型の大小という属性についても当初は検討課題となっていた。しかしながら、これもその中間に位置する資料の線引きが困難であり、また型式によっては、大型あるいは小型の製品だけで構成されるものもあって、土偶全体を通じての数値的な大小を取り上げるよりも、むしろ個々の型式内での大型小型という相対的位置付けの方が研究テーマとしても有効な価値がありそうである。いずれにしても現段階では客観的な数値化は難しく、資料収集が完了した時点での統計により位置付けるべき **Personal Data** とすることができるだろう。

### 3) 特記事項

文献②では、部位属性として製作時の部位情報としての属性と、欠損細部属性として二次的な人為作用に関する属性とに区別して次のように考えた。

#### <部位属性>

1. 製作時の特徴痕
2. 細部部位表現
3. 特徴文様
4. 彩色
5. 備考

#### <欠損細部属性>

1. 二次焼成痕
2. 再接合痕
3. 細部欠損状態
4. 剥落状態
5. 備考

これらは、いわば個体の説明であり、正面、両側面、裏面に分けた観察情報を記述によりデータ化しようとしたのであった。しかし、前にも述べたように記述によるデータ化がデータの客観性、均一性の面で好ましくないという前提に立ち返ってみた場合、この方法は再検討を余儀なくされたのである。

特に細部部位表現、特徴文様の項目は、土偶の概念的認識の面で多分に観察者の主観に頼らざるを得なくなる。特徴文様については、当初幾つかの代表的な属性を列挙する方法も検討したのであったが、部位の文様の区分が明確に行えない点や、文様の捉え方に個人的な見解の相違が予想されることから、現状ではこれらは **Personal Data** とした。また、細部部位表現についても遺存部位の項で述べたとおりで、同様に割愛した。

そこで、最終的には部位属性と欠損細部属性とをひとまとめにして、その中から **Open Data** として認められる属性に限り、特記事項という項目に一括して扱うこととした。

記入の方式は以下のとおりである。

#### 特記事項

- |               |                      |
|---------------|----------------------|
| 1. アスファルト等の付着 | 3. 芯棒痕 ( )           |
| a. 割れ口 ( )    | 4. 擬口縁状の割れ口 ( )      |
| b. 表面 ( )     | 5. ソケット状の割れ口 ( )     |
| 2. 彩色         | 6. 貫通孔 ( )           |
| a. 割れ口 ( )    | 7. 火熱による変色、ひび割れ等 ( ) |
| b. 表面 ( )     | 8. その他 ( )           |

アスファルト等の付着，彩色，火熱による変色，ひび割れ等は焼成後の土偶に加えられた二時的な作用に関する情報であり，芯棒痕，擬口縁状の割れ口，ソケット状の割れ口については，製作時の特徴で，破損面の観察から得られる情報である。このうちアスファルト等の付着，彩色については，割れ口と表面とに分け，さらに全ての属性について，後に ( ) を付し，部位や状態等を略記できるようにした。

#### 4. 今後の問題点

以上が土偶の直接的なデータ内容に関する現時点での基本的な確認事項である。これに基づいて，今後データベース作成の具体的な作業に当たり使用される周囲情報を含めた調査カードを作成した（第5・6図）。その際特に配慮した点は，各データの項目と属性が絶対的なものではないということであった。それは，重ねて繰り返すが土偶が全体を通じては規格性に乏しい性質の遺物であり，具体的に示された土偶個々のかたちに対する認識も未だ流動的であるという，長期にわたって続けられてきた討議の結果我々が得た結論によるものである。そのため各項目毎に「その他」「備考」の欄を設けた。これにより，属性は将来的に増加する性格を備えることになった。すなわち，現時点では **Personal Data** とせざるを得なかったものも，将来的には **Open Data** となる可能性もあり，それに対応し得るということである。そうした意味で，この現在における絶対性と将来における可変性という二面的性格の把握は，現在進めている土偶に限らず，今後行われるであろうその他の遺物のデータ化に際しても同様に必要とされる前提的な条件となるに違いない。

現在，この調査カードを使用してすでに資料の収集に着手しているが，さらに収集作業が進んだ段階で恐らく新たな問題点も明らかになると思われる。その不備を的確に補い得るものは，実測図・写真による画像データであろう。一面では画像データは最も客観性の高い性質のデータといえることができる。

今回の調査カードには実測図あるいは写真等を添付する欄を設けたが，あくまでも

土 偶 調 査 カ ー ド

		整理 No						
		台帳 No						
		コード1	コード3					
		コード2	コード4					
1 遺跡	フリガナ	(1)						
	0 遺跡名	(2)						
	フリガナ							
2 土	1 所在地	① 都道府県	市郡区 町村丁					
	2 位置	① 緯度	② 経度					
	3 地図名	(1/5万) (1)	(2)					
偶	0 時期	1 草創期 2 早期 3 前期 4 中期 5 後期 6 晩期 7 不明						
	1 土器型式							
	2 出土遺構	1 住居跡 { a 覆土 b 床面 c 柱穴 d 壁溝 e 炉 f 埋甕 } 2 土器捨場 3 ビット 4 墓塚 5 配石遺構 6 貝層 7 表土 8 表採 9 不明 10 その他 ( )						
	3 通称名	1 板状土偶 2 十字形土偶 3 ハート形土偶 4 筒形土偶 5 山形土偶 6 みみずく土偶 7 透光器土偶 8 ポーズ土偶 9 両面土偶 10 不明 11 その他 ( )						
	4 遺存部位	1 完 存			6 腹 部 (右 左)			
		2 ほぼ完存			7 腕 部 (右 左)			
		3 頭 部			8 脚 部 (右 左)			
		4 胸 部 (右 左)			9 その他 ( )			
		5 乳 房 (右 左)						
	5 現存最大長	cm						
6 つくり	1 中実 2 中空 { a ほぼ全身 b 頭部 c 胸・腹部 d その他 ( ) }							
7 特記事項	1 アスファルト等の付着 ) 3 芯棒痕 ( ) a 割れ口 ( ) 4 擬口縁状の割れ口 ( ) b 表 面 ( ) 5 ソケット状の割れ口 ( ) 2 彩 色 ) 6 貫通孔 ( ) a 割れ口 ( ) 7 火熱による変色、ひび割れ等 ( ) b 表 面 ( ) 8 その他 ( )							
8 備 考								
実測図、写真								

国立歴史民俗博物館

第 5 図

4. 今後の問題点

地図、実測図、写真、備考	
所蔵者、機関	31
実測者、撮影者	実測 <sup>33</sup> 撮影 <sup>34</sup>
4 文 献	① 年 月 ③
① 報告者、著者	④ ⑥
② 発行年月	① ② 年 月 ③
③ 報告書、論文名	④ ⑥
④ 掲載誌	① ② 年 月 ③
⑤ ページ	④ ⑥
⑥ 刊行所	
記 入 日	51 1 9 年 月 日
記 入 者	52

第 6 図

補足資料として考えている。実測図等の画像データをデータベース化するために整備しなければならない技術的または概念的な環境は、将来の実用的な利用を前提として、今後課せられた大きな課題といわねばならないだろう。

おわりに、改めてことわるまでもないが、本稿は昭和58年以来我々の研究会において重ねられてきた討議の、一応の締め括りとしてまとめたものである。研究会への参加、及び小稿の機会を与えてくださった小林達雄、八重樫純樹、西本豊弘の各先生方をはじめ、学友の武藤康弘、植木智子両氏に対して深く感謝申し上げる次第であります。

#### 参考文献

- ① 八重樫純樹・小林達雄・野口正一 1983 「縄文時代における土偶の情報構造に関する一考察」応用情報学研究年報 Vol 8 No. 2
- ② 八重樫純樹・小林達雄・野口正一 1984 「縄文時代土偶の情報構造に関する基礎的考察」国立歴史民俗博物館研究報告 第3集

#### 挿図引用文献（番号は図中のNo.に対応する。）

- 1・38・39・54 茨城県史編さん第三部会原始古代史専門委員会 1979 『茨城県資料』考古資料編先土器・縄文時代 茨城県
- 2 原田昌幸 1987 「縄文時代の初期土偶」MUSEUM 434 東京国立博物館
- 3 立木新一郎他 1986 『西大宮バイパスNo.4 遺跡』大宮市遺跡調査会報告第16集
- 4 市原寿文他 1965 「縄文文化の発展と地域性 6 東海」『日本の考古学』Ⅱ 縄文時代 河出書房
- 5 山内清男 1934 「是川一王寺遺跡発見の土偶」ドルメン3-7 岡書院
- 6・9 小笠原好彦 1984 「縄文時代前・中期の土偶」宮城の研究1 清文堂
- 7 鬼形芳夫 1973 「高崎市八幡山遺跡出土の土偶」まえあし14 東国古文化研究所（4～7は写真トレース）
- 8 坂詰伸男・江坂輝弥 1938 「東京市板橋区志村小豆沢字四枚畑貝塚に於ける一石器時代住居址の発掘について」考古学雑誌 28-6 日本考古学会
- 10 我孫子昭二他 1974 『北八王子西野遺跡』東京西線及び北八王子変電所遺跡調査会
- 11・12 岩手大学考古学研究会 1978 『大館町遺跡』盛岡市教育委員会
- 13 北上市立博物館 1980 『岩手県に於ける北上川流域の土偶』
- 14 江坂輝弥 1970 『石神遺跡』ニューサイエンス社（図は写真トレース）
- 15・19・24・28・41・44～46 永峯光一他 1977 『日本原始美術大系』3 講談社（図は写真トレース）
- 16・17・23 柴田俊彰 1977 『月崎遺跡発掘調査概報』第2次発掘調査 福島市教育委員会
- 18・30・40 浜野美代子氏作図
- 20 林康男 1983 「縄文中期土偶の一姿相—いわゆる河童型土偶について—」長野県考古学会誌 46号
- 21 新潟県立三条商業高等学校社会科クラブ考古班 1974 『吉野屋遺跡』
- 22 新潟県 1986 『新潟県史』通史編1 原始・古代
- 25 藤森栄一 1969 『縄文の世界』講談社



#### 4. 今後の問題点

- 26 八王子市柵田遺跡調査会 1976 『柵田遺跡群』1975年度調査概報
- 27 埼玉大学考古学研究会 1970 『膳棚』鳳翔7号
- 29 大塚和義 1975 「縄文中期の三つ口」季刊どるめん5 JICC出版局  
藤森栄一 1973 「縄文人のお産—縄文農耕の存在を信じて—」季刊どるめん1
- 31 天間勝也他 1974 『中の平遺跡発掘調査報告書』青森県教育委員会
- 32 山道紀郎他 1974 『近野遺跡発掘調査報告書』Ⅱ 青森県教育委員会
- 33 福島県 1930 『福島県発見石器時代土偶図版』福島県史跡名勝天然記念物調査報告第3  
(図は写真トレース)
- 34 永峯光一・植木弘 1982「土偶」『日本歴史地図 原始古代編(上巻)』柏書房
- 35 神林淳雄 1943 「筒形土偶に就て」人類学雑誌58—6 (図は写真トレース)
- 36 赤羽篤・赤羽義洋 1979 「長野県上伊那郡辰野町出土の土偶」信濃31—4
- 37・40 中村良幸 1979 『立石遺跡』大迫町教育委員会
- 42 富田紘一 1981 『上南部遺跡発掘調査報告書』熊本市教育委員会
- 43 宮内克己 1980 「九州縄文時代土偶の研究」九州考古学No.55
- 47 野村崇他 1973 『札刈遺跡—北海道上磯郡木古内町札刈の国道拡幅に伴う緊急発掘調査報告書—』木古内町教育委員会
- 48・49 会田容弘 1979 「東北地方における縄文時代終末期以降の土偶の変遷と分布」山形考古3—2
- 50 須藤隆 1974 「青森県二枚橋遺跡出土の打製石偶について」『日本考古学・古代史論集』
- 51 図書刊行会 1976 『小山台貝塚』
- 52 なすな原遺跡調査会 1984 『なすな原遺跡』No.1 地区調査
- 53 上総国分寺台遺跡調査団 1977 『西広貝塚』早稲田大学出版部
- 55 都留市教育委員会 1973 『中谷遺跡』  
” 1974 『中溝遺跡』
- 56・57 片岡肇 1983 「近畿地方の土偶について」『古代叢論』角田文衛先生古稀記念事業会
- 58・59 荒巻実・設楽博己 1985 「有髭土偶小考」考古学雑誌71—1